

# オースティン「語る、とはいかなることか」再訪

榊原 英輔

## 1 はじめに

『オースティン哲学論文集』に収められた1篇の論文「語る、とはいかなることか：その単純化された諸形態」においてオースティンは、対象語「I」とタイプ語「T」を繋辞でつないだ文、「IはTである」(“I is a T”)を用いて、4つの異なるタイプの主張ができるかと唱えた(Austin 1979)。

この論文の成果は、彼が生前に成し遂げた他の業績とは一応独立して理解できるものである。しかし、その意義を考える上では、それを言語行為論の文脈の中に位置づけて理解するべきである。というのも、1通りの真理条件しか持たない「IはTである」という文を4通りの異なる仕方で使用できるという事実は、言語には文の真理条件という観点からは到達できないような多様性が存在し、言語行為論がその多様性を捉えることのできる有用な理論であることの例証となるからである<sup>1)</sup>。

私が「語る、とはいかなることか」を採り上げて説明と再構成を加えたいと思ったのは、この論文の中に、言語行為論を組み立てていく上で重要なアイデアがいくつも眠っていると考えたからである。オースティンの論文は決して難解ではないが、細やかな気配りが随所に示されている一方で、それぞれの部分で取り出された差異を保ちつつ、関係を明確化し、全体を整合的な1枚の図式に収めるのは難しい。そのせいで、論文に含まれている啓発的なアイデアが、利用しづらいものになってしまっているのだ。本論で試みたいのはまさに、「語る、とはいかなることか」において開発された諸概念の関係の整合的な図式を描くことである。その過程では、オースティンのいくつかの主張は否定されることになるが、それでも損失より利益の方が多いはずだ、と私は信じている。

2節では、オースティンが言語状況 $S_0$ と呼ぶものについて説明する。3節では、「あてがいの方向」と「適合の責任」という2つの概念を解説し、それと論文中に出てくる他の概念との違いを明確にしたうえで、4つのタイプの主張の違いを図式的に示す。4節では、言語状況 $S_1$ という $S_0$ より複雑化した状況において、 $S_0$ とどのような違いが生じてくるかについて、私見を加えつつオースティン自身の考えを振り返る。5節では、「IはTではない」という否定文を主張する場合には、4つの主張のサブタイプのうち2つしか実行できないというオースティンの説に対する反例を挙げたい。なお、各節のタイトルに付したページ数は原著の対応する範囲を示している。

## 2 言語状況 $S_0$ (134–40)

「語る、とはいかなることか」においてオースティンが考察するのは、言語状況 $S_0$ という、極限まで単純化された人工言語の使用場面である。言語状況 $S_0$ では、諸対象は1つ、そしてただ1つ

<sup>1)</sup> この点はフィエンゴとマッククルーレも指摘するところである (Fiengo and McClure 2002, 7)。

の名前を持ち、1つの対象が2つ以上の名前を持っていたり、2つの対象が同じ名前を持っていたりすることはない。それぞれの対象はただ1つのタイプに属しており、2つ以上のタイプに属していたり、どのタイプにも属していなかったりということはない。現実の世界では、1つの対象が同時に丸くて赤いというように、複数のタイプに属することがあるし、緋色であることと赤いこととの関係のように、タイプ間に包含関係が存在することがある。現実世界のこのような複雑性は、言語状況  $S_0$  においては排除されているということである。

本論ではオースティンに倣い、通し番号（これは名前の代わりとなる）が付けられた多数のタイルが存在し、タイルの形はひし形、円、三角形、六角形の4通りで、中間的な形は存在していないという状況を考えることにしよう。状況の単純さに対応するように、 $S_0$  の言語的な道具立ても単純であり、用いることができるのは、タイルを指す対象語（通し番号）と、形を指すタイプ語を繫辞の「～は…である」(“is a”) で繋いだ、「IはTである」(“I is a T”) という形式の文だけである。但し「I」のところには、「876」や「1227」といった、対象語（タイルの通し番号）が入り、「T」のところには、「円」「三角形」「六角形」といったタイプ語が入るものとする。

オースティンによれば、この形式の文を用いた言語行為を支えているのは、図1に表したような4つのつながりである。第1のつながりは「1227」のような番号と、その番号が名であるところの対象との間の慣習的つながりである。第2のつながりは、「ひし形」などのタイプ語と、その意味との間の慣習的つながりである。第3のつながりは、タイルが持つ（ひし形、円などの）タイプと意味の間の自然的適合関係、第4のつながりは、「1227」という語と「ひし形」という語が「～は…である」という繫辞を介して連結される主張的つながりである。

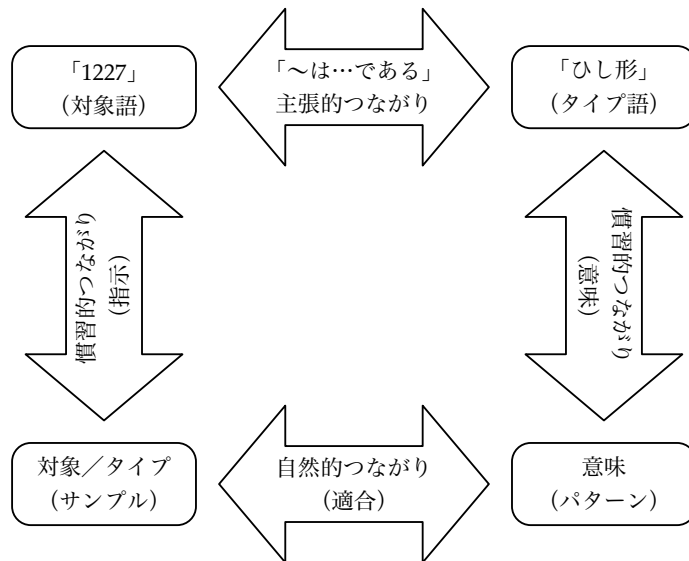


図1 言語状況  $S_0$  を支える4つのつながり<sup>3)</sup>

<sup>3)</sup> この図は、『オースティン哲学論文集』（坂本百大監訳、勁草書房、1991年）214頁の図をもとに作成したものである。最初にこの図を見たとき私は、「対象／タイプ」という不可解な表記に困惑し、「対象語」の意味が「対象」であるなら、「タイプ語」の意味は「タイプ」であって、「タイプ」と「意味」を別のものとして扱うのはどうしてだろうか」と疑問に思ったものである。私は前者の困惑に対しては3.2節で、後者の疑問に対しては4節で解決を試みている。

2種類の慣習的なつながりは、名付け (name-giving) と意味付け (sense-giving) によって昔成立したものである。名付けと意味付けは、オースティンがかつて述定的 (constative) な言語行為と対比した、遂行的 (performative) な言語行為に属している (Austin 1976)。名付けと意味付けの違いは、名と意味のどちらが予め与えられているかの違いである。名付けの場合はまず意味の方が予め与えられており、「ここに、このタイルを『1221』と名付ける」というように、その意味に名前が付与される。意味付けの場合は名の方が予め与えられており、「ここに、『1221』はこのタイルを指すものとする」というように、その名前に意味が付与される。このような、言語的立法化 (linguistic legislation) の手続きは、過去に1回だけ実行されれば十分であり、主張をするたびに繰り返す必要はない。実は  $S_0$  より複雑な言語状況  $S_1$  においては事情が少し異なるのだが、それは4節で論じることとする。

オースティンは、主張という言語行為が成立する以前の段階に、より基本的な2つの間違いの可能性が存在すると論じている。それは誤称 (misnaming) と指し違い (misreferring) である。誤称とは誤ったタイプ語を用いることであり、指し違いとは誤った対象語を用いることである。

この2つの誤りが生じるのには、逸脱 (aberration) による場合と個人の特異性 (idiosyncrasy) による場合がある。逸脱によって誤称や指し違いが生じる場合というのは、要するに口が滑ってしまい、言おうと思っていたのとは別のことを口にしてしまった場合である。例えば「1227」と言おうとした所を「1228」と言ってしまうのは、逸脱による指し違いである。逸脱を犯した話し手は、自らの誤りに自分で気づく場合がある。個人の特異性によって誤称や指し違いが生じる場合というのは、話し手が対象語の指示対象や、タイプ語の意味をそもそも取り違えて理解していた時に生じる。例えば「ひし形」という語を、三角形を意味する言葉だと誤解していたような場合は、個人の特異性による誤称を犯していることになる。逸脱の場合とは対照的に、個人の特異性によって誤りを犯した人は、他の人に指摘されない限り自分の誤りに気づくことはできない。

オースティンはこの2つの誤りを、主張という言語行為全体の誤りではなく、主張という言語行為の一部を構成する、「語を用いる」という行為に付随する誤りであると指摘する。そして、全体としての言語行為と、その一部である語を用いるという行為は異なるレベルに属しているため、全体としての言語行為を考える時には、誤称や指し違いは取り扱わなくてよいと論を進めた。確かに、「IはTである」という文を用いて主張する際には、「I」がある対象を正しく指し、「T」がある意味を正しく表しているということは主張の前提とされている。しかし私は、このような前提を無視するのではなく、主張の争点となることと対比するのでなければ、適合の責任 (onus of match) という概念を正しく理解することはできないと考えている。この点は、3.2節で論じることにした。次節ではオースティンの見解を追いかけつつ、同時に私の修正案も提示していきたい。

### 3 主張の4つのサブタイプ (140–46)

オースティンは、「IはTである」という至極単純な文でも、それを用いて4つの異なるタイプの主張ができると論じる。彼が区別する主張の4つのサブタイプを理解するためには、あてがいの方向 (direction of fit) と適合の責任 (onus of match) という2つの概念を理解するのが近道であり、また唯一の道である。というのも、4つのサブタイプの違いは、2通りのあてがいの方向と2通りの適合の責任の組み合わせによって生じるからである。オースティンは、これらの違いについて様々な説明を加えているのだが、彼の説明は不明瞭な所があり、特に適合の責任については彼

自身が混乱していると思われる。そこで、彼の説明を追っていくのではなく、まず私の解釈を提示し、テキストを引用してその解釈の妥当性を検討していく、というスタイルを採ることにしたい。

### 3.1 あてがいの方向

2つの区別のうち、よりとつきやすいのはあてがいの方向 (direction of fit) の違いである。Direction of fit というと、今日ではアンスコムとサールに端を発する、世界と言葉の間の関係の2通りの方向性を表す言葉として有名であるが、オースティンの言う「あてがいの方向」はこれとは全く異なるものであり、主語 (対象語) と述語 (タイプ語) の関係性を表す言葉になっている。

「IはTである」という文を用いて主張を行う場合、IまたはTのどちらか一方が問いであり、他方がそれについての答えとなる、という係り受けの構造が隠れている。あてがいの方向の違いは、文の中で何が問いで何が答えになっているかの違いに由来する。ひとえに「1227はひし形である」と主張するといっても、「1227はどのような形か?」という問いに答えてそうする場合と、「ひし形であるのはどれか?」という問いに答えてそうする場合とでは、あてがいの方向が異なっているのである。問いは、答えの真偽の基準を提供する。答えは問いにあてがわれるのである。主張が誤りであった場合、訂正されるべきは問いではなく答えの方であるから、あてがいの方向の違いとは、主張が誤りであった際に、主語と述語のどちらが訂正されるべきかの違いであると理解しておいてもよいだろう。主語が述語にあてがわれる場合、述語が主語の正しさの基準を定めている。述語が主語にあてがわれる場合、主語が述語の正しさを定めている。オースティンの記述を引用しよう。

私たちはある名を「与えられ (given)」て、その名の意味に適合 (match) する (あるいは適合される) タイプの対象を提示 (produce) しようとする場合がある。……逆に、われわれはある対象を「与えられ」て、その対象のタイプに適合する (あるいは適合される) 意味を持つ名を提示しようとする場合もある。(Austin 1979, 141; 翻訳は引用者による)

オースティンはあてがいの方向の違いを、タイプ語 (name) と対象 (item) のうち、どちらが与えられた (given) もので、どちらが提示された (produced) ものであるかの違いだと表現しているが、主語=対象、述語=タイプ語、与えられたもの=問い、提示されたもの=答え、と対応関係をつければ、これは私の説明と本質的には同じであることが分かるはずである。

あてがいの方向の違いは、英語では発話される文の表層構造に違いをもたらさないが、日本語では、「は」と「が」の違いとして、文の表層構造に反映される傾向にある。例えば、「1227はひし形である」と主張する時は、「1227は」が与えられた句で、「ひし形である」が提示された句となるのに対し、「1227がひし形である」と主張した際は、「ひし形である」が与えられた句であり、「1227が」が提示された句であるという印象が強まるであろう。

この知見をさらに進めて、フィエンゴとマッククルーレは「は」を主要部とする句 (「～は」という句) は例外なく与えられた句になり、「は」以外の助詞を主要部とする句——例えば、「が」を主要部とする句——は例外なく提示された句になると主張した (Fiengo and McClure 2002)。しかし「例外なく」というのはいかにも言いすぎであった。「は」が提示された句を形成することもあるのだ。「どれがひし形だったっけ?」という問いに対し、「いろいろあるけど、1227はひし形だよ」と答えるのは至極自然である。また、「が」が与えられた句を形成するケースも、稀ながら存在すると思う。例えば「太郎が何したって?」という問いに「太郎が結婚したんだよ」と答える

こともあろう。フィエンゴとマッククルーレの意見が正しいとすると、「I is a T」を「Iは(ひとつの) Tである」と坂本らが和訳したのは、英語の原文にはあつたあてがいの方向の多義性を消してしまった点で致命的な誤訳だったことになるが、訳書に対するそのような批判を、私はこれまで聞いたことがない。

英語においても、強調構文を使ったりアクセントを置いたりすることで、あてがいの方向の違いを文の表層構造に反映させることができる。“It is 1227 that is a rhombus”と主張した場合、強調されている“1227”は必ず提示された句となる。逆に、“1227 is a rhombus”のように、“rhombus”にアクセントを置いて発音すれば、強調されている“rhombus”が提示された句であると確定させることができる。

### 3.2 適合の責任

次に説明したいのは、適合の責任 (onus of match) の違いである。適合の責任の違いというのは、対象の性質が争点になっている場合と、意味の性質が争点になっている場合の違いを指している。主張が誤りであった場合に、前者では対象の誤知覚 (misperception) が疑われるのに対し、後者では意味の思い違い (misconception) が疑われる。聞き手は、誤った主張をした話し手を、前者では「もっとよく見てみる」とたしなめるのに対して、後者では「もっとよく考えてみる」とたしなめることになる。適合の責任についての同様の解釈は、フィエンゴとマッククルーレ (Fiengo and McClure 2002, 32–37) および、ギブソン (Gibson 2004, 185–93) にも見られる。オースティンは誤知覚を事実に対する違反、思い違いを言語に対する違反と呼ぶことがあるが、どちらの違反を犯した者も、世界についての誤った信念を抱いている点では違いがないということには注意しなければならない。話し手が世界についての正しい信念を持っているにもかかわらず誤った主張をしてしまうのは、指し違いや誤称といった語の誤用がある場合に限られるのである。

オースティンは適合の責任について、次に示したような3通りの説明を加えている。

- ① 私たちは対象のタイプと名の意味が適合する (match) ということを根拠に名を対象にあてがったり、対象を名にあてがったりする。だがXとYが適合する (matching X and Y) という場合、XをYに適合させる (matching X to Y) 場合と、YをXに適合させる (matching Y to X) 場合の区別があるのであり、これは適合の責任 (onus of match) における区別と呼ぶことができるだろう。(Austin 1979, 141; 翻訳は引用者による)
- ② 位置づけ (placing) と例示 (instancing) においては共に、対象のタイプは当然視 (taken for granted) され、問題 (the question) であるのはタイプ語の意味が本当にそれに適合するかということである。対して、言明 (stating) と選り出し (casting) においては共に、タイプ語の意味は当然視され、問題であるのは対象のタイプが本当にそれに適合するかということである。(Austin 1979, 143; 翻訳は引用者による)
- ③ 譲れない基本点というのは、適合の誤りが可能であり、実際に生じもするという、その誤りは適合される2つの要素のいずれか一方 (either) を誤った仕方では把握すれば生じうるということである。同じ対象に注意を向け (advert to) ながら、そのタイプを違ったパターンに適合させてしまうこと、すなわち誤知覚 (misperception) が可能であり実際にも生じるように、同じ意味に注意を向けながら、それを違った対象のタイプに適合させてしまうと

ということがありうるのである。(Austin 1979, 144; 翻訳は引用者による)

①では、適合の責任の違いとはタイプ語の意味を対象のタイプに適合させるか、対象のタイプをタイプ語の意味に適合させるかの違いである、と説明されている。しかしこれでは、あてがいの方向と適合の責任の違いがよくわからなくなってしまうのではないだろうか。というのも、あてがいの方向の違いとは、タイプ語を対象にあてがうことと、対象をタイプ語にあてがうことの違いと説明されていたからである。この2つは、“fit”を“match”に変えたという以外に、どのような本質的な違いがあるのだろうか。

②は、適合の責任というものの本質の一端を垣間見せてくれている。主張が真となるのは、タイプ語の意味と対象のタイプが適合した時なのであるが、個々の主張では、一方は当然視 (taken for granted) され、他方がそれに適合するかどうか問題視される (questioned)。適合の責任の違いというのは、どちらが当然視され、どちらが問題視されるかの違いである、というのである。しかし、まだ fit と match の違いはぼんやりとしたままである。当然視－問題視という対比と、与えられたもの－提示されたものという対比とはどう違うのだろうか。

私は③の説明においてようやく、あてがいと適合の決定的な違いが示されると考える。ここでは、適合の失敗は、適合させられる2者のいずれか一方を把握し損ねることで生じる、と記されている。ある対象に注意を向け (advert to) ながら、対象のタイプを把握し損ねることは誤知覚 (misperception) であり、上記の引用には記されていないが、ある意味に注意を向けながら、それを異なる対象のタイプと適合すると考えてしまうのは思い違い (misconception) である<sup>4)</sup>。ここで重要なのは、誤知覚と思い違いは同時に起こりうる、という点である。②の説明と組み合わせるなら、誤知覚と思い違いは同時に起こりうるが、個々の主張においては、対象把握と意味把握のうち一方の正しさは当然視され、他方が問題視されるということが適合の責任の違いが生まれる原因なのである。対して、あてがいの方向においては、主語と述語が同時に間違っているということは論理的に不可能であった。なぜなら、問いは答えの正しさの規準を提供するものであり、問い自体は正しかったり誤っていたりするものではないからである。

適合の責任という概念をよりはっきりと理解するために、図1を少し改造して用いることにしたい。図1の左下には「対象／タイプ」という不可解な表現があった。「対象」と「タイプ」は異なるのだから、これははっきりと分けてしまいたい。すると、図2のようになる。対象語とタイプ語を誤った仕方で連結すると誤った主張になるのだが、これは以下の4つのつながりのうち、1つ以上の破綻によって生じる。

- 対象語とそれが指示する対象の間のつながりの破綻＝指し違い (misreferring)
- タイプ語とその意味の間のつながりの破綻＝誤称 (misnaming)
- 対象とその対象が属するタイプの間のつながりの破綻＝誤知覚 (misperception)
- 意味とその意味が包摂するタイプの間のつながりの破綻＝思い違い (misconception)

つながりの破綻は同時に2つ以上生じることもあるだろう。2つの誤りがちょうど打ち消しあって、主張としては正しいものになってしまうということもありうる。極端な場合、指し違いと誤知覚と思い違いと誤称の4つを同時に犯しながら、それぞれの間違いがうまくかみ合って、結果的

<sup>4)</sup> 別の箇所に、位置づけ違い (misplace) と例示違い (misinstance) は思い違い (misconception) による (ibid., 144-45) と記されており、これが根拠となる。

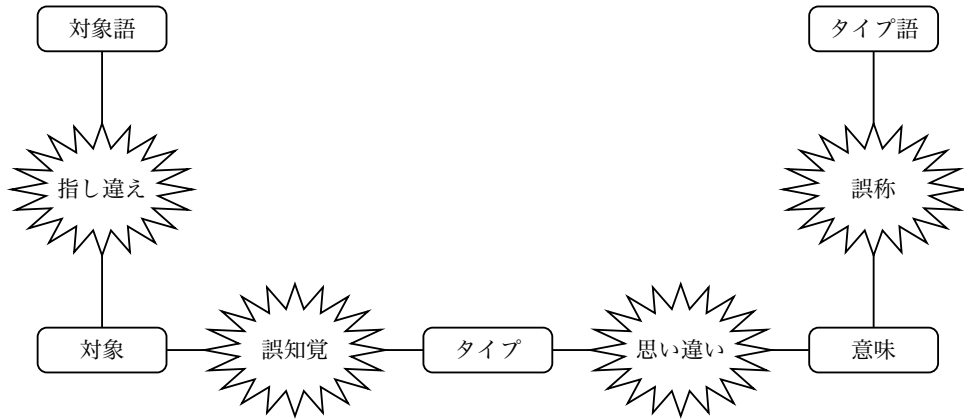


図2 主張を支える4つのつながりとその破綻

には正しいことを言っている、ということさえ論理的にはありうるのである。適合の責任というのは、主張を支えているこの4つのつながりのうち、どの1つが問題視され、そして残りの3つが当然視されるかを区別するための概念である。別の言い方をするならば、個々の主張において3つのつながりの正しさは主張の前提とされており、その前提のもとに4つ目のつながりの正しさが主張の争点とされるのだ。主張が誤りであった場合、争点となっているつながりの妥当性が最初に疑われる。しかし主張の誤りは時に、争点となっていたつながりの誤りによってではなく、前提されていたはずのつながりの誤りによって生じていたということが判明する。このような場合、誤っていた箇所の同定には多くの時間と労力がかかるものである。

適合の責任を負うつながりは4ヶ所存在しているが、対象語と対象のつながり、タイプ語と意味のつながりは、「IはTである」という文を主張する際には常に前提とされている。そのため主張の争点となりうるつながりは、対象とタイプのつながり（この場合対象把握の正しさが問題となる）と意味とタイプのつながり（この場合意味把握の正しさが問題となる）の2つが残るのである。

慣習的なつながりを争点とするような主張というのも確かに存在している。典型的には、知覚や意味の把握に問題はないが、語の意味についての知識がおぼつかない外国人との会話においてそのような主張は見られる。但し、そのような主張では、「このひし形の名前は『1227』である」とか、「1227の形は『ひし形』と呼ばれている」といった文を用いなければならないだろう。

大石は、オースティンの論文に触発され、単称文と総称文の違い、ドネランの提案する確定記述の指示的用法 (referential use) と帰属的用法 (attributive use) の違い、そしてバートン＝ロバーツが提案する A タイプ言明と B タイプ言明の違いは、適合の責任の違いによって説明できると主張する (Oishi 2003)。

例えば、“The dog has four legs” という文は、特定の犬が4本足であることを主張する場合にも、犬という種が一般的に4本の足を持っていることを主張するためにも用いることができる。これが単称文と総称文の違いとされるものである。指示的用法と帰属的用法の違いは、ドネラン自身の例で説明するならば、“Smith’s murderer is insane” という文の2通りの解釈に対応している (Donnellan 1966, 285)。この文はスミスを殺した犯人がジョーンズだと分かっている、ジョーンズが正気ではない、ということをも主張するためにも用いることができる。これが指示的用法であ

る。一方この同じ文は、誰がスミスを殺したかまだ分かっていない状況で、スミスを殺すような者は誰であれ正気ではない、ということを手張するためにも用いることができるだろう。これが帰属的用法である。パートン＝ロバーツが提案する A タイプ言明と、B タイプ言明の違いとは、“Max is a dandy” という文を “Who is a dandy?” という問いに対する答えとして述べた場合 (= A タイプ言明) と、“What is a dandy?” に対する答えとして述べた場合 (= B タイプ言明) の違いを指している。前者ではマックスの性質が問題となっているのに対し、後者では、ダンディーであるとはいかなることかが問題となっており、“Max is a dandy” という答えは、マックスという例を示すことで、ダンディーさを定義しようとする試みになっている。

私は、A タイプ言明と B タイプ言明の違いが適合の責任の違いを反映したものであるという意見には賛成であるが、単称文と総称文の違いや、指示的用法と帰属的用法の違いの説明にも適合の責任の概念が応用できるとすることについては、大石に反対である。というのも、後 2 者は例文にも示されているとおり、主語が “the dog” や “Smith’s murderer” などの (確定) 記述句である時に生じる多義性であり、オースティンが言語状況  $S_0$  において想定していた、主語が固有名詞である場合に生じる多義性とは別種のものだと考えるべきだからである。

しかし大石は、適合の責任が意味の把握の側にあるような主張におけるある重要な特徴を見抜いており、その点では評価できると思う。それは、適合の責任が意味の側にある場合、話者は対象そのものには興味がなく、対象のタイプにのみ興味があるということである。対象に言及するのはひとえに、それを介して対象のタイプを指定するためなのである。同じタイプに言及できるなら、1227 を介さなくてもよかったのだ。したがって日本語であれば、特定の対象に関心があるわけではないことを明示的に示すために、「みたいなもの」を固有名詞につければ、適合の責任が意味の側にあることをはっきりさせられるだろう。「1227 みたいなものはひし形である」と私たちが言う時、適合の責任は意味の側に固定されるのである。確かに、総称文や確定記述の帰属的用法にも、特定の対象には関心がなく、それが属するタイプにのみ関心があるという特徴がある。しかし対象とタイプの関係は、オースティンの場合とちょうど逆になっているのである。帰属的用法や総称文では、タイプを介して特定の対象が指定されるという構造がある中でタイプにのみ関心が向くのにに対し、オースティンの場合は、対象を介して特定のタイプが指定されるという構造がある中で、タイプにのみ関心が向くのである。

### 3.3 主張の 4 つのサブタイプの図式化

2 通りのあてがいの方向と 2 通りの適合の責任から、4 つの主張のサブタイプが帰結する。オースティンが「位置づけ＝何であるかの同定 (placing = c-identifying)」と呼ぶのは、あてがいの方向が述語から主語の方向で、意味の側が適合の責任を負う言語行為である。次に「言明 (stating)」は、あてがいの方向は述語から主語の方向だが、対象の側が適合の責任を負う言語行為である。そして「例示 (instancing)」は、あてがいの方向は主語から述語の方向で、適合の責任を意味の側が引き受ける言語行為である。最後に「選り出し＝どれであるかの同定 (casting = b-identifying)」は、あてがいの方向が主語から述語の方向で、対象の側が適合の責任を負う場合である。この 4 つの主張を図示すると図 3 のようになる。

図 3 の見方を説明しよう。図 2 に示したように、主張にはそれを支えるつながりが 4 つあったが、線で囲った部分はそのうち主張の際に前提とされているつながりを、太い矢印は主張の争点と



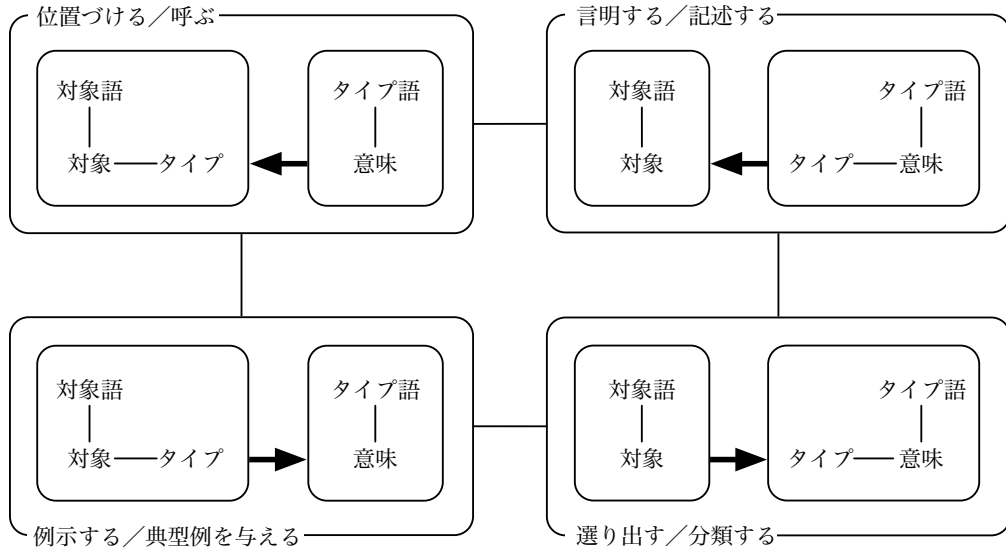


図3 主張の4つのサブタイプ

なっているつながりを表している。例えば位置づけでは、対象語と対象の間のつながり、タイプ語と意味の間のつながり、対象とタイプの間つながりは前提とされており、それらを前提としながら、意味とタイプのあいだのつながりが主張されている。矢印の方向は、あてがいの方向の違いを表している。例示の場合は、主語から述語へという方向であり、位置づけの場合はその逆になっている。4つの主張のサブタイプの間にかかれた縦の線は、適合の責任が同じであることを意味している。つまり位置づけと例示、言明と選り出しは、適合の責任が同じである。一方横の線は、あてがいの方向が同じであることを意味している。位置づけと言明、例示と選り出しはあてがいの方向が同じである。各言語行為名の「/」の右側に書かれているのは、次節の主題となる言語状況  $S_1$  での、それぞれに対応する言語行為につけられた名称である。

そもそも、内部に分節構造を持つ文（つまり1語文ではない文）を用いて主張するというのとはどういうことかということ、他の語と組み合わせることも可能であるような、したがって予めつながっているわけではないような複数の語それぞれに何かを代表させ、それらの語を物理的時空間の中で連ねることで、それらの語によって代表されているものの間の繋がりを知らせることである。語は、話し言葉では時間的に、書き言葉では空間的に連ねられる。「IはTである」という形式の文を用いて主張がなされる場合、主張の争点は「I」と「T」が共起することによって示される何かなのである。これが可能となるためには、関係する各項目が対象語またはタイプ語のいずれか一方と予めつながっており、全体として2つの<島>を形成していなければならない。この事前のつながりこそ、これまで主張の前提と私が呼んできたものである。主張の争点は、こうしてできた2つの<島>が<架橋>されるという点に存するのである。

## 4 言語状況 $S_1$ (146–51)

言語状況  $S_0$  における主張の 4 つのサブタイプの区別を論じたあとに、オースティンは言語状況  $S_0$  を少しだけ現実の言語状況に近づけた、言語状況  $S_1$  というものについて考察を進めていった。言語状況  $S_1$  では、対象のタイプがタイプ語の数よりもずっと多く、実在するタイプがどのタイプ語の意味にも精確には適合しない、ということが起こりうる。この複雑化は、世界の多様性に比して、語彙の数が限られている現実の言語状況を模している。

言語状況  $S_1$  においても、あてがいの方向と適合の責任の違いに応じて 4 つの主張のサブタイプを区別することができ、図 3 に示したように、「呼ぶ (call)」「記述する (describe)」「典型例を与える (exemplify)」「分類する (classify)」というそれら 4 つのサブタイプの違いを、 $S_0$  の場合と同じように図式化することが可能である。私は、新たに導入されたこのような複雑性によって、言語状況  $S_0$  においては不明瞭であった 2 つの点が明確になるのではないかと考えている。

第 1 の点は、この複雑性によってようやく、「タイプ」と「意味」を別のものとして区別する理由がはっきりしたということである。 $S_0$  においては、それぞれのタイプに 1 対 1 対応する意味があったため、タイプ語の意味とは別個のものとしてタイプというものが存在すると想定するのには不自然さが残った。タイプ語の意味とはすなわちタイプなのではないか、というわけである。だがこの不自然さは  $S_1$  では解消される。というのも、タイプと意味はその数が違うからである。

第 2 の点は、第 1 の点と関係しているのだが、意味とタイプの違いが明瞭になったことによって、意味を同定することと、同定された意味を正しく把握することの違いが明瞭になったということである。この区別をつけられることが、誤称と思い違いを区別するためには不可欠である。言語状況  $S_0$  において、この両者がどう違うかについて思い悩んだことのある人は、オースティンの図式をしっかりと理解できていた人である。 $S_0$  においてこの 2 者は概念上区別されるが、区別を立てる実質的な意味が欠如していると私は考えている。というのも、 $S_0$  においては、意味とタイプを区別することに実質的な意味がないからである。意味とタイプが同じなのであれば、意味を正しく同定しながら、その意味がどのようなタイプを包含するかについて思い違えるということは不可能であろう。

しかし、オースティンはさらに先を行っている。意味とタイプは単に異なるだけでなく、あるタイプをある意味の下に収容するということが、立法的な契機を持つ積極的な行為であるということが、 $S_1$  において明らかとなるのである。確かに、あるタイプがある意味に類似しているということは、それを主張する以前から存在している客観的な事実であるかもしれない。しかし「I は T である」と主張する時、私たちは単に類似性を指摘すること以上のことをしているのである。それは、単に基準に従った行為であるだけでなく、「I ほど T に似ているものは、T に含めてよい」、という基準を新たに作り出す行為でもあるのだ。ひとたびある主張が妥当であると判断されたなら、すでに存在する類似性だけでなく、その判断自体が根拠に加わって、その後になされる主張の妥当性の基準を形成することになる。つまり妥当な主張には、「先例による規約 (legislation by precedent)」あるいは「判例法 (case law)」の契機があるのである。この事情をもっともよく表しているのは、 $S_1$  における 4 つの主張のサブタイプの中でも、典型例を与える (exemplify) という言語行為であると思う。私たちが典型例を与えるという言語行為を行うたびに、典型例 (examples) は蓄積していく。そしてこの典型例の蓄積によって、タイプ語の意味はより境界明瞭なものになっていくの

である。

S<sub>0</sub>では、慣習的なつながりは過去に1回だけ行われた名付けや意味付けという言語行為によって成立したものであると理解されていた。しかしこのような理解は、日常言語の起源の説明としてはあまりに非現実的なものである。言語的慣習の成立過程は、成文法よりは判例法の成立過程に類似したものであり、慣習に従ってなされる1回1回の実践が当の慣習をより確定的で強固なものにする、という循環構造があるのだ。別の視点から見れば、述定的な言語行為の代表とされる主張にも、遂行的な要素が必ず含まれているということである。

## 5 否定文 (151–53)

オースティンは最後に、図3において対角線の関係にある位置づけと選り出し、例示と言明の間にも類似性を見出そうとして、「IはTではない」(“I is not a T”)という型の文を用いて主張する場合を検討している。オースティンは、「IはTではない」という型の文を用いてできるのは言明と例示だけであり、位置づけと選り出しはできないから、図3で対角線上に位置する言語行為の間には類似性があると考えた。

だが、これは間違っていると思う。否定文を用いて位置づけたり選りだしたりすることは実際可能なのだ。例えば、「ひし形」という語の意味をどう把握するべきかが問題となっているときに、「1227はひし形ではない」と言えば、これは否定文を用いて位置づけを行ったことになるだろう。聞き手は、「いやいや『ひし形』の意味をもっとよく考えてみなさい。1227はまぎれもなくひし型だよ。確かに1227は長方形ではないかもしれないけどね」とたしなめるかもしれない。また、これまで見てきたタイルのうち、ひし形でないものにはどのようなものがあつたかを問題にする場合を考えれば、否定文を用いた選り出しも可能だということが分かる。このとき口にされる「そうだそうだ。1227がひし型ではない」という主張は、否定文を用いた選り出しなのである。聞き手はそれに対して、「いやいや、もっとよく見てよ。1227はひし形だよ。ひし形じゃないのは1228だろ」と応じるかもしれない。

オースティンの誤りは、位置づけを「何であるかの同定」、選り出しを「どれであるかの同定」と呼んでしまったことにあるのだと思う。確かに、「～は…でない」と同定することはできないし、否定的同定(negative identification)というのは奇妙な概念である。だが、4つの主張のサブタイプは、それにどう名前をつけようと、あてがいの方向と適合の責任の組み合わせによって特徴づけられるべきなのだ。否定文を用いて位置づけや選り出しが実際にできる以上、位置づけや選り出しの中には、「同定」とは呼べないものもある、と私たちは考えるべきなのではないだろうか。

## 6 結び

本論では、オースティンの「語る、とはいかなることか」を通覧し、一貫性を保ちながらその諸部分の関係を明確化することを目指して説明と再構成を加えた。1節でも述べたように、本論は紛れもなくオースティンの言語行為論の一部である。しかし後にサールによって整備されていた言語行為論の枠組みには取り入れられなかったためか、この論文は独り置き去りにされている。だが、「語る、とはいかなることか」には、現実の言語活動における細やかな綾を丹念にほぐし分けていく繊細さと、それを単に記述するのではなく、巧みな理論を組み立てて整理していく大胆さという

二面性を兼ね備えた、オースティン哲学の魅力が申し分なく表れているのだ。本論がオースティン読解の一助となり、そしてオースティンのファンが増えるきっかけとなってくれば幸いである。

## 参考文献

- Austin, J. L. 1976. *How to do things with words: The William James Lectures delivered at Harvard University*, ed. J. O. Urmson, and M. Sbisà. 2nd ed. Oxford: Oxford University Press. (Orig. pub. 1955.)
- . 1979. How to talk: Some simple ways. In *Philosophical Papers*, ed. J. O. Urmson, and G. J. Warnock, 134–53. 3rd ed. New York: Oxford University Press. (Orig. pub. 1961.) (= 1991. 坂本百大監訳『オースティン哲学論文集』勁草書房, 209–40.)
- Burton-Roberts, N. 1986. Thematic predicates and the pragmatics of non-descriptive definition. *Journal of Linguistics* 22:41–66.
- Donnellan, K. S. 1966. Reference and definite descriptions. *The Philosophical Review* 75:281–304.
- Fiengo, R., and W. McClure. 2002. On how to use -*Wa*. *Journal of East Asian Linguistics* 11:5–41.
- Gibson, M. I. 2004. *From naming to saying: The unity of the proposition*. Malden, MA: Blackwell.
- Oishi, E. 2003. Semantic meaning and four types of speech act. In *Perspectives on dialogue in the new millennium*, ed. P. Kühnlein, H. Rieser, and H. Zeevat, 135–47. Amsterdam: John Benjamins Publishing.

## 謝辞

オースティンの勉強会において慶応義塾大学の峯島宏次氏からは有益なアイデアを、また高千穂大学の金杉武司氏、東京大学の森永豊氏、島村修平氏、千葉大学の壁谷彰慶氏、村瀬智之氏、慶応義塾大学の本多肇氏からは、本論文の初期の原稿に対して種々のコメントを頂き、一部を修正稿に反映させることができました。また藤女子大学の大石悦子氏には自身の論文を送っていただき、参考にすることができました。ここに記して、諸氏に感謝の意を表します。